

近衛植家詠本『源氏物語』について

築田愛英

一 はじめに

京都大学文学研究科図書館蔵『源氏物語』五四帖（以下、近衛植家詠本）は室町時代の公卿、近衛植家（一五〇二または一五〇三—一五六六年）のもとで永祿年間（一五五八—一五七〇年）に作成された寄合書の写本である。植家は將軍家と姻戚關係を持ち、関白を務め、朝廷だけでなく武家政治にも発言力を持ち得た⁽¹⁾。文化的には連歌会や歌会を興行し、連歌師や五山僧といった文化人を牽引する役割を果たした⁽²⁾。

近衛植家詠本には同時代に活躍した連歌師里村紹巴（一五二四または一五二五—一六〇二年）が深く関わっている。彼は南都から上京し、植家や三条西公条（一四八七—一五六三年）など、公卿から古典を学ぶことで連歌師としての地位を高めた。紹巴は多くの『源氏物語』の写本作成に書写や校合などさまざまな形で関わり、上野英子氏の報告では十八点の写本が現存する⁽³⁾。近衛植家詠本では、「須磨」の書写を担当し、加えて奥書と目録を執筆している。

本写本について、木田章義氏は「慶長頃の書家、連歌師の筆跡の基準として利用できるという点が本書の研究上の価値なの

である」⁽⁴⁾と述べている。写本を収める内箱や表紙の設えは豪華で、芸術的にも価値が高い。しかし、本写本の本文や書誌はまだ詳しく紹介されていない。そこで本稿では近衛植家詠本の書誌を報告し、本文の様相について暫定的な見通しを述べる。

二 近衛植家詠本について

二—一 近衛植家詠本の書誌情報

近衛植家詠本の書誌をまとめておく。

【基本情報】

- ・ 京都大学文学研究科図書館蔵（請求記号 国文学費Zb11）。
- ・ 写本五四冊、帙なし。付属資料として里村紹巴筆の目録一冊、畠山牛庵（二代目）の極札四十七枚が貼付された冊子一冊あり。

【外箱】

- ・ 黒漆地に金銀で桐の蒔絵を施した内箱の中に収められている。内箱の大きさは縦二〇・〇糎、横三一・七糎、高さ二八糎。
- ・ 五糎。前板を外すと三段二列の引き出しがあり、その大き

さは縦一九・〇糎、横三〇・二糎、高さ八・三糎で横面が広くびれとなっている。引き出しの前面に金泥で巻名が記されている。

【体裁】

・表紙寸法は一六・八糎×一四・〇糎。表紙は檜皮色地の鳥の子。各巻の題名や内容に合わせた文様が金泥・銀泥で描かれている。中央に書題箋貼付。題箋の寸法は一〇・〇糎×二・五糎。丹色地に霞・金砂子振。題名は巻名のみを墨書。

・列帖装(四孔。綴糸は赤色)。

・本文料紙は鳥の子。

・前後見返しともに金紙に押し模様。

【本文・書入】

・四三名の寄合書(後述)。

・本文は片面九行(「藤裏葉」のみ一〇行)、一行一八字内外。和歌は改行し一字ないしは二字下げで、下まで続けて書いて改行、和歌の終わりには地の文がそのまま後続する。

・朱点、朱合点、墨による訂正・異本注記、貼紙による校合訂正箇所有り。ただし次の通り朱書きや貼紙のない巻もある。

朱点・朱合点のない巻……「胡蝶」「篝火」

貼紙のない巻……「若紫」「胡蝶」「篝火」「柏木」「匂宮」「紅梅」「竹河」「橋姫」「椎本」「早蕨」「宿木」「東屋」「浮舟」「蜻蛉」「手習」

・蔵書印なし。

・各巻墨付きの最後の丁の左上に筆者を注記した小紙が貼付されている。

・巻末に「一校了」の識語有り。「若紫」「花宴」「葵」「花散里」

「朝顔」「少女」「胡蝶」「横笛」「匂宮」「総角」「蜻蛉」にはこの識語が無い。「桐壺」と「夢浮橋」は朱、それ以外の巻は墨で書かれている。

【奥書】

・以下の三箇所奥書がある。

「此源氏物語者毛利大蔵大輔殿元康／以予本数度御校合畢／可為証本者也于時慶長五年／仲夏書之而已／紹巴(花押) (桐壺)」

「此源氏物語者永禄年中／近衛殿大閤御所惠雲院御新調之／御本也其已後心前所持畢但不足／之分頃毛利大蔵大輔殿元康／被加書以予本校合者也／文禄四年季秋下旬／紹巴(花押) (夢浮橋)」

「毛利大蔵大輔殿元康依／御所望書也／紹巴(花押) (目錄)」

二二二 奥書について

右掲の奥書は紹巴の筆であり、その読み下しは次の通りである。

「此の源氏物語は毛利大蔵大輔殿元康、予の本を以て数度御校合し畢んぬ。証本と為すべき者也。時に慶長五年仲夏之を書くのみ。」

「此の源氏物語は永禄年中近衛殿大閤御所惠雲院御新調の御本也。其の已後心前所持し畢んぬ。但し不足の分、頃毛利大蔵大輔殿元康、加書せられ予の本を以て校合する者也。文禄四年季秋下旬。」

「毛利大蔵大輔殿元康の御所望に依り書く也。」

「桐壺」「夢浮橋」の奥書により、本写本の由来を知ることができる。永祿年間に恵雲院、すなわち近衛植家のもとで源氏物語の書写が行われた。永祿年間というと紹巴は三十代後半、里村一門の代表として天文二十二年（一五五三年）に近衛家の歌会に出席してから五年以上が経ち、公家社会に顔が知られるようになった頃である。永祿十年（一五六七年）には『紹巴富士見道記』にて「伝授をば恵雲院殿近衛殿 太閤御所よりいささか承り」^(五)と、植家から古今伝授を受けたと述べており、両者の関係の深さがうかがえる。

その後、紹巴の弟子であった連歌師心前が本写本を所持していたが、欠巻があったため、文祿四年（一五九五年）九月（季秋）から慶長五年（一六〇〇年）五月（仲夏）を含む期間に補写が行われた。奥書を文字通り解釈すると、「武将毛利元康が欠本を補充し紹巴の本をもとに校合した」の意となるが、『北野社家日記』には武将からの要望を紹巴が北野松梅院に依頼する形で『源氏物語』を完成させた例があり^(六)、本写本も実際には紹巴が取り次いで人選を行ったと考えられる。毛利元康（一五六〇—一六〇一年）は安芸の武将であり毛利元就の八男にあたる。紹巴は毛利家一門と交流があり、中でも元康とは特に関係が深く、和歌や連歌の写本を送ったり元康自筆本に加証奥書を記したり等の活動が確認できる^(七)。目録の奥書は、元康の希望により、紹巴の手によって目録が書かれたというを示す。

二一三 書写者とそれぞれの巻の書写時期について

この本の特徴の一つは、書写に参加した紹巴が記した目録が残されていることである。この目録は後世に書かれたものではなく、書写が行われた時期に制作された。そのため、目録に記された書写者の情報は信頼性が高い。

また、本写本には書写者の手がかりとして、目録だけでなく、各巻末尾に貼紙があり、加えて「牛庵」の印が押された畠山牛庵（二代目）による極札も付属する。それらを一覧表として示すと別表一「書写者一覧表」の通りである。

目録と貼紙と極札とを比較した時、それぞれに記されている書写者の名はほとんど一致するが、異なる巻もあり、書写者の存命時期と写本が作成された時期とが齟齬する場合がある。具体的には「若紫」「花散里」「胡蝶」「総角」の四巻である。

「若紫」は目録が大覚寺義俊を示すのに対し、貼紙は「中院大納言通茂」、極札は「中院通茂卿」と書かれている。中院通茂は生年が寛永八年（一六三一年）であるため、本写本が作成された時期には生まれていない。

「花散里」は目録と貼紙に「竹内御門跡」すなわち曼殊院門跡と書かれている。目録によると曼殊院門跡の人物が書いた巻には「橋姫」があるが、現存する「花散里」^(四一)と「橋姫」^(四二)とは同筆とはみなし難い。牛庵の極めでは「花散里」が良尚法親王、「橋姫」は覚想法親王（一五二二—一五七四年）の筆跡と鑑定されているものの、良尚法親王は元和八年（一六二二年）の生まれであり、写本が作成された時期には生まれていない。『日本書蹟大鑑』掲載の覚想法親王の短冊^(四三)、^(四四)と比較すると、「橋姫」の筆跡は「を」の書き方や右上がりの筆致が一致し、覚想法親王の筆跡であることが確認できるが、

一方「花散里」にはそうした特徴が見られない。「花散里」の書写が「橋姫」とは別人であると仮定し、写本の制作年代を考えると良恕法親王（一五七四—一六四三年）が自然だが、現存する良恕法親王の筆と比べてにわかには同筆と断定はできない。そのため「花散里」の書写者については後考を期したい。

「胡蝶」の書写者は、目録に紹巴が記すのではなく、本文末尾のものと同じ青色の小紙を貼付する形で示されている。書写を担当したとされる飛鳥井雅章は慶長十六年（一六一一年）の生まれであり、写本が作成された時期には生まれていない。

「総角」は目録と極札には「禅昭」と記されているのに対し、貼紙には「禅昌」と書かれている。いずれも松梅院の人物で禅昭と禅昌は叔父と甥の関係にあたる⁽⁹⁾。禅昌は「御法」の書写を担当しているが、「総角」と「御法」の筆跡は似通っており、異筆とは断定できない。

以上、書写者名に疑問の残る巻について述べた。上記の四つの巻において、表紙や本文料紙の種類は他の巻と同一であり、装丁に不審な点は見られない。

次に、書写者の生没年をもとに写本の成立時期について考える。紹巴の目録に書かれている書写者の名は、門跡名や苗字のみが記され、個人を特定できないものもあるため、目録だけでなく個人が特定できる巻をとりあげる。

永禄年間に書写されたことが確実である巻としては「桐壺」「夕顔」「少女」「鈴虫」「夕霧」「橋姫」「夢浮橋」が挙げられる。これらの書写を担当した人物は文禄四年以前に亡くなっている。「橋姫」は門跡名のみ記載だが、前述の通り寛恕法親王の筆跡と判断できるため、永禄の書写に分類できる。また「須

磨」は木田氏の見立てでは永禄年間の書写で作られたものとされている⁽⁹⁾。

右の巻々の書写者の中で没年が早いのは「夕霧」書写の石井了派である。『石井三家系図』には石井了派は永禄二年（一五五九年）に逝去したと書かれている。中嶋謙昌氏によると、『石井三家系図』は後年に作られた資料で、了派の没年が「何に依拠していたのかは不明」⁽¹⁰⁾である。中嶋は了派の追善連歌の記録から「永禄四年五月を遠くさかのぼらない時期であったと考えてよい」⁽¹¹⁾と推定している。主催の植家自身も永禄九年（一五六六年）に亡くなっていることをも含めて勘案すると、当該写本が最初に制作されたのは永禄の前半であったと推定される。

文禄から慶長にかけて書写されたことが確実であるものは「花宴」「御法」「匂宮」「紅梅」である。永禄年間に生まれていない人物がここに分類できる。加えて永禄元年時点で「明石」「横笛」書写の速水友益は二歳、「蛭」書写の中院通勝は三歳と若すぎるため、文禄の書写に参加した可能性が高い。

そのほかの巻の書写時期については、書写者が不明であったり、両方の書写時期に参加できた可能性があったりするなど、判断の根拠となる事柄が少ないので判断保留とする。

三 近衛植家詠本の本文について

三―一 調査方法

次に近衛植家詠本の本文について暫定的な調査結果を述べ

る。あくまでも調査途中の段階の見通しである。

調査を行った巻は「須磨」「橋姫」「夢浮橋」である。いずれも永祿年間の書写と推定されるものであり、「須磨」は奥書を記した紹巴の筆である。また「夢浮橋」を書写した三条西公条は紹巴の師にあたる人物である。公条は天文二十四年（一五五五年）から永祿三年（一五六〇年）まで源氏講釈を行い、紹巴はこれに参加していたと推測されている^{〔十四〕}。紹巴と関わりの深い公条が書写した本文であるため調査対象とした。「橋姫」は「須磨」「夢浮橋」と同じ永祿年間に作成された写本であるため、比較する巻として採用した。

本文の比較に際し、まず『源氏物語大成』（以下、『大成』）所収の諸本と付き合わせた結果、青表紙本系統の本文に近いことがわかった。たとえば、「須磨」一丁ウ五行目「うき物とおもひすつる世も」（『大成』三九五頁七行目）は、河内本系統の本文^{〔十五〕}では「うとましき物におほしはつるなへての世をも」と書かれている。また「須磨」五丁ウ五行目「おもひ給らざりし」（『大成』三九八頁一行目）は御物本、陽明文庫本の本文では「おもひたまいかけざりし」と書かれている。上記二例は青表紙本系統の本文には異同がなく、近衛植家詠本の本文と一致する。

さらに、右の調査の中で、青表紙本の中でも日本大学蔵三条西家本の本文に近いという見通しを得た。そこで三条西家本と『大成』底本を主たる比較対象とし、必要に応じて大成所収の他の諸本とも比較する。三条西家本とは公条の父にあたる実隆が中心となって大永五年（一五二五年）から享祿三年（一五三〇年）の間に「家本となるべき『源氏物語』を作ろうと慎重に」^{〔十六〕}

作られた写本である。室町末期から近世初期には宮内庁書陵部蔵の後陽成院宸筆本などにたびたび書写底本として用いられた^{〔十七〕}。さらに、大覚寺蔵本や幽斎奥書本など三条西家本出現以後に作られた写本は、この本を校訂に用いる傾向がある^{〔十八〕}。そのため本写本に影響を与えた可能性は高い。

なお、『大成』の底本は「須磨」「橋姫」は大島本、「夢浮橋」は池田本である。

異同を抽出する際には原則として「見」「み」などの漢字・平仮名等の表記による異同、「む」「ん」、「お」「を」など仮名遣いによる異同、送り仮名の有無による異同は相違箇所と認めなかった。また衍字訂正、校合等書き入れのある箇所については、結果として本文が相違する箇所のみ本稿では問題とする。相違箇所を数える際には原則として文節を単位として数えたが、一連の語句において出入りがある場合などは全体で一例と数えた。

三―二 結果

調査結果は別表二の通りである。近衛植家詠本と三条西家本は、相違数が『大成』底本と比較した場合よりも少なく、本文が同じ箇所が多いことがわかる。相違数だけでなく、三条西家の本文に近い特徴として次の二つが見られた。

一つは三条西家独自の本文と同様の本文を持つ箇所があるという点である。『大成』所収の青表紙本系統の本文の中で、三条西家本のみに見られる本文と同様のものが近衛植家詠本にも確認できた。別表三の（一）～（三）（表の最上段に示した用

例番号を〇内に記す)は、調査した三巻それぞれにおいて、近衛植家詠本が三条西家本の独自本文と一致する箇所用例である。(一)で副助詞「だに」が入る本文、(三)で「むつまじき」とする本文は三条西家本のみ、(二)では「れいのゝたち給」を欠くのは三条西家本と肖柏本のみである。

また、訂正により、『大成』底本などに見えるほかの本文から、三条西家本の本文へと改められている箇所が、特に「橋姫」に複数見られた。(四)では、三条西家本にも近衛植家詠本と同様に「と」を添入する書き込みが確認できる。『大成』によると御物本・陽明文庫本に同様のものが見られる。(五)の「かうはしく」を欠くのは三条西家本・阿里莫本・麦生本に見られる。(六)のように「なむ」を欠くのは三条西家本のみである。

三条西家の本文と相違する箇所は誤写と見られるものが多いが、「須磨」では一部に河内本系統の本文が見られた。(七)では近衛植家詠本のように「のみ」を入れる本文は青表紙本系統の諸本には見えず、『大成』所収の河内本系統の諸本と御物本に見られる。また貼紙による訂正のある箇所では、河内本系統の本文を根拠とする傾向がある。たとえば(八)では貼紙で添入された「きわの」という語を持つ本文は、河内本系統諸本と御物本・陽明文庫本に見られる。また、(九)のように「まき

らはしに」(貼紙)を持つ本文は肖柏本(青表紙本系統)、河内本系統諸本^{十七}、保坂本・阿里莫本・麦生本・桃園文庫旧蔵本に見られる。貼紙による注は「須磨」で七箇所、「夢浮橋」で二箇所確認できた。

四 まとめ

以上、近衛植家詠本について、書誌と現段階で判明した本文の性質を述べた。奥書では本写本の制作時期は「永禄年間」であるとのみ記されているが、書写者をもとに絞り返むと、永禄の前半期に成立したと考えられる。その時に書写された巻は「桐壺」「須磨」などが現存する。また調査した三巻の本文は青表紙本系統、中でも三条西家本の本文に近いという見通しが得られた。一方で完全に三条西家本と一致するというわけでもなく、相違する箇所には河内本の特徴が見られるところもある。

他の巻にも同様の特徴が見られるかどうか、他の紹巴・三条西家が関連する『源氏物語』写本との関係については後考を期したい。

別表一、書写者一覧表
凡例

・書写者についての記載がない巻は次のように示す。
ナシ……貼紙そのものがない状態である。
(空欄)……目録の項目や貼紙はあるが、空白となっている。

若紫	夕顔	空蟬	帯木	桐壺	巻名
大覚寺殿様称念寺殿	万里小路殿 惟房卿	聖護院殿様	青蓮院殿様	恵雲院殿様 御書次聖護院様	目録
中院大納言通茂	万里小路殿 惟房卿	聖護院殿様	青蓮院殿様	恵雲院殿様	貼紙
中院殿通茂卿	万里小路殿惟房卿	照高院殿道澄准后	青蓮院殿尊朝法親王	近衛殿植家公 照高院道澄准后 両 筆	極札
一七二〇 一五六七 (義俊) 一五〇四— (通茂) 一六三一—	一五一三—一五七三	一五四四—一六〇八	一五五二—一五九七	一五六六 (道澄) 一五四四— 一六〇八	生没年(西暦)
貼紙は水色。目録は義俊(植家弟)を指す。				一五六六 (道澄) 一五四四— 一六〇八	備考

閑屋	蓬生	濡標	明石	須磨	花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	末摘花
同	昌叱	西洞院殿	速水左衛門尉友益	紹巴	竹内御門跡様	毘沙門堂殿	妙藏院 禪祐	聖護院殿新宮様	妙法院殿様	梶井殿様
昌叱	昌叱	西洞院殿	友益 速水左衛門尉	紹巴	竹内御門跡様	毘沙門堂殿	妙藏院 禪祐	聖護院殿新宮様	妙法院殿様	梶井殿様
策庵昌叱	策庵昌叱	西洞院殿時慶卿	速見 ^(マ) 左衛門尉友益	臨江齋紹巴法眼	王曼珠 ^(マ) 院殿良尚法親	毘沙門堂殿公厳僧正	妙藏院禪祐	聖護院殿道勝法親王	妙法院殿常胤法親王	梶井殿応胤法親王
一五三九―一六〇三	一五三九―一六〇三	一五五二―一六三九	一五五七―一六〇七	一五二四―一六〇二	一六二二―一六九三	生没年未詳	一五五五―一六〇一	一五七六―一六二〇	一五四八―一六二一	一五二一―一五九八
				一説には生年一五二五年。			注1参照。			

篝火	常夏	螢	胡蝶	初音	玉鬘	乙女	朝顔	薄雲	松風	絵合
龍山様	(空欄)	也足中院殿	飛鳥井大納言雅章	(空欄)	春日社家 東地井宮内大輔 祐範	藤宰相殿 永相殿	竹田宗具 南都	梶井殿様	日野殿	玄旨
龍山様	(空欄)	中院殿 也足	飛鳥井大納言雅章	ナシ	東地井宮内大輔 春日社家祐範	藤宰相殿 永相殿	竹田宗具 南都	梶井殿様	日野殿	玄旨
近衛殿龍山	ナシ	中院殿素然	飛鳥井殿雅章卿	ナシ	春日社家宮内大輔祐 範	高倉殿永相卿	南都竹田宗具	梶井殿応胤法親王	日野殿資勝卿	細川玄旨法印
一五三六一―一六一二		一五五六―一六一〇	一六一一―一六七九		一五四二―一六二三	一五三一―一五八五	生没年未詳	一五二一―一五九八	一五七七―一六三九	一五三四―一六一〇
近衛前久(植家)		中院通勝のこと。	貼紙が水色。目録も水色の貼紙		中臣祐範のこと。		貼紙は鳥の子色。			

鈴虫	横笛	柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	行幸	野分	
大膳大夫殿俊直	友益	黒梅飛鳥井殿 平田入道	(空欄)	(空欄)	紹九 南都	六条殿	(空欄)	飛鳥井殿	四辻殿 公遠卿	烏丸殿	
大膳大夫 俊直	友益	黒梅飛鳥井殿 平田入道	(空欄)	(空欄)	紹九 南都	六条殿	(空欄)	飛鳥井殿	四辻殿 公遠卿	烏丸殿	
北小路大膳大夫俊直	速見 ^(マ) 左衛門尉友益	平田黒梅	ナシ	ナシ	南都紹九	六条殿有親卿	ナシ	飛鳥井殿雅庸卿	四辻殿公遠卿	烏丸殿光宣卿	
一五三〇―一五九四	一五五七―一六〇七	生没年未詳			生没年未詳	一五六四―一六一六		一五六九―一六一五	一五四〇―一五九五	一五四九―一六一一	
		子。飛鳥井雅親の弟									子)のいし。

総角	権元	橋姫	竹河	紅梅	匂宮	幻	御法	夕霧
禅昭 松梅院	(空欄)	竹内御門跡様	永純	玄仍	景敏	藤之 聖護院殿 御内人	禅昌 北野 松梅院	石井了派
禅昌 松梅院	ナシ	竹内御門跡様	永純	玄仍	景敏	藤之 聖護院殿御内 人	禅昌 北野松梅院	石井了派
北野松梅院禅昭	ナシ	正 曼珠 <small>(マユ)</small> 院殿覚怒大僧	永純	素雪斎玄仍	景敏	聖護院殿御内人藤之	北野松梅院禅昌	石井了派
(禅昌) 一五七一— 一六三一 (禅昭) 生没年未詳		一五二一—一五七四	生没年未詳	一五七一—一六〇七	一五七四—一六三六	未詳	一五七一—一六三一	生年未詳—一五五九
					貼紙は鳥の子色。 昌琢(紹巴弟子) のこと。	注2参照。		

奥書・目録に関する極札

源氏物語筆者目録	桐壺之卷奥書	夢浮橋之卷奥書
臨江齋紹巴法眼	臨江齋紹巴法眼	臨江齋紹巴法眼

夢浮橋 三条西殿公條公	手習 堀江式部少輔殿 晴元御馬廻	蜻蛉 梅庵	浮舟 (空欄)	東屋 (空欄)	宿木 (空欄)	早蕨 (空欄)
称名院殿 三条西殿 公条公	堀江式部少輔 晴元御馬廻	梅庵	ナシ	ナシ	(空欄)	(空欄)
三条西殿公条公	春元内堀江式部少輔	梅庵	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
一四八七―一五六三	未詳	六 一五三六?―一五九				
極札一枚あり。 奥書についての	注3参照。	大村由己のこと。				

〔注〕

- 1、生年未詳とする説もあるが、「永禄三年（一五六〇年）に六歳」という後掲山澤論文の記述をもとに逆算した。
 - 2、伝未詳。「藤之 聖護院殿／御内人」については「日本古文書ユニオンカタログ」にて、「藤之」の判が押された「聖護院門跡増御教書案」（天文二十一年正月十六日）の存在が確認できたが、判を押した人物の詳細や目録に示された人物との関係は不明である。また、「藤之」は武将三淵藤英（？—一五七四年）の幼名であるが、藤英と聖護院の関係を示す資料は管見では得られなかった。
 - 3、伝未詳。「晴元」とは管領を務めた武将、細川晴元（一五一四—一五六三年）を指すのだろうか。
- 本表の作成にあたり、次の資料を参考にした。
- ・市古貞次他編『国書人名辞典』（全五巻、岩波書店、一九九三—一九九九年）
 - ・川崎佐知子「里村紹巴と奈良連歌——『狭衣物語』享受史研

- 究の一助として——」（『待兼山論叢 文学篇』三四号、二〇〇〇年十二月）
- ・古筆手鑑大成編集委員会編『古筆手鑑大成 第十五巻手鑑（重美）島根・美保神社蔵』（角川書店、一九九五年）
 - ・小松茂美編『日本書蹟大鑑』（全二十五巻、講談社、一九七八—一九八〇年）
 - ・東京大学史料編纂所「日本古文書ユニオンカタログ」
<http://wwwapp.h.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>（二〇二一年二月二十六日閲覧）
 - ・畠山箕山著・正宗敦夫編纂校訂『頭伝明名録 日本古典全集』（全二巻、日本古典全集刊行会、一九三八年）
 - ・山澤学「北野祠官筆頭松梅院の定着と豊臣政権——『北野社家日記』禪昌記の考察——」（『歴史人類』四十五巻、二〇一七年三月）
 - ・石井三家系図（京都大学附属図書館蔵）（「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」<https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>）にて公開の画像を二〇二一年二月二十六日閲覧）

別表二

相違数	植家誂本と三条西家本	須磨	27	橋姫	43	夢浮橋	7
相違数	植家誂本と大成底本		96		94		45

別表三
凡例

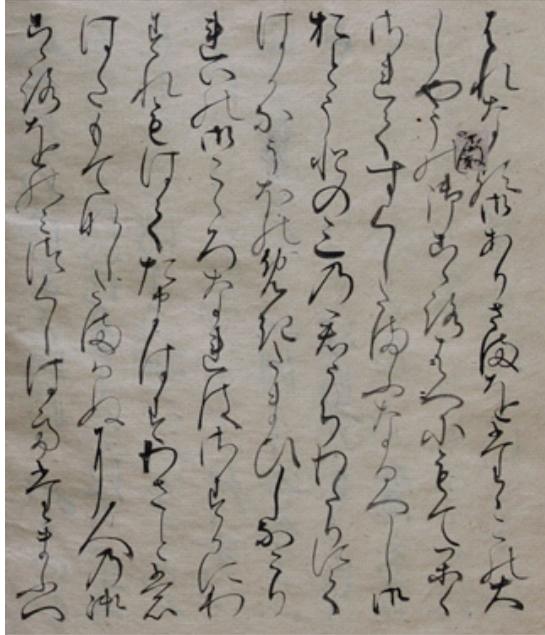
- ・ 丁数は近衛植家誂本の丁数、頁・行は『源氏物語大成』のページ数と行数を示す。
- ・ 本文の書き入れは次のように示す。

○……挿入記号。右記は挿入される本文である。
 “……見消。”内の文字が見消されている本文である。
 □内の文字が貼紙により挿入される本文である。
 あ……貼紙。

用例番号	巻名	丁数	植家誂本	三條西本	大成底本	頁・行
一	須磨	57才3	かくたにあらは	かくたにあらは	かくあらは	436・3
二	橋姫	44才2	給てかろらかに	給てかろらかに	給てれいのいとしのひやかにいてたち給かろらかに	1535・3

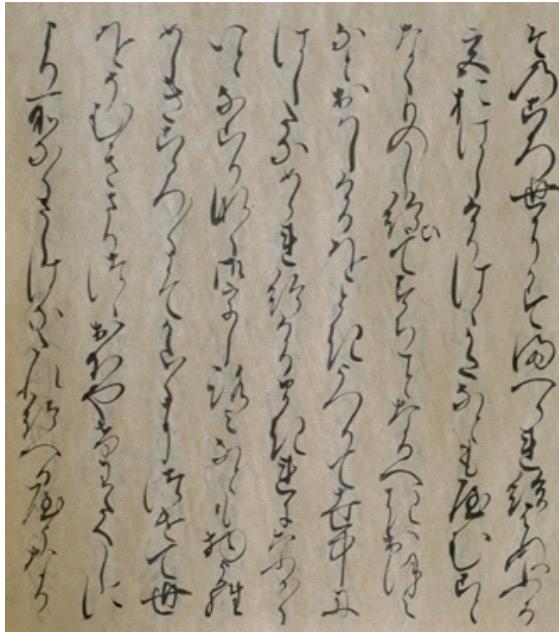
九	八	七	六	五	四	三
夢浮橋	須磨	須磨	橋姫	橋姫	須磨	夢浮橋
15ウ1	23ウ1	23才4	34才6	27ウ5	42ウ6	1才6
おもひて ○ <small>しんぎわ</small> をくと	ましき <small>きわ</small> のおさめ	あらはとのみ聞えて	こと“なむ”侍し	あやしく“かうはしく”にほふ	と <small>と</small> ○まらす	むつまじきこと
おもひてをくと	ましきおさめ	あらはときこえて	こと侍し	あやしくにほふ	と <small>と</small> ○まらす	むつまじきこと
おもひてをくと	ましきおさめ	あらはときこえて	ことなむ侍し	あやしくかうはしくにほふ	とまらす	したしきこと
2063 ・ 11	411 ・ 7	411 ・ 4	1528 ・ 8	1524 ・ 7	426 ・ 4	2055 ・ 3

← 図一、近衛種家誂本『花散里』一丁ウ（二〇一四年五月撮影）



← 図三、小松茂美編『日本書蹟大鑑 第十卷』（講談社、一九七八年）画像番号一二七（根津美術館蔵）
著作権により非公開

← 図二、近衛種家誂本『橋姫』一丁オ（二〇一四年五月撮影）



← 図四、小松茂美編『日本書蹟大鑑 第十卷』（講談社、一九七八年）画像番号一二八（島根・美保神社蔵）
著作権により非公開

[注]

- (一) 湯川敏治「足利義晴將軍期の近衛家の動向——植家と妹義晴室を中心に——」『日本歴史』六〇四号、一九九八年九月
- (二) 中本大「永祿三年正月の近衛家の文事——近衛家新年試筆詩をめぐって——」『論究日本文学』八四号、二〇〇六年五月
- (三) 上野英子「潮廼舎文庫蔵『紹巴奥書本源氏物語』と『紹巴抄』」『潮廼舎文庫研究所年報』八号、二〇一〇年三月
- (四) 木田章義「源氏物語（文学研究科図書館所蔵）」『静脩』五一号三卷、二〇一四年十月 六頁。
- (五) 高橋良雄他編『中世日記紀行文学全評釈集成 第七卷廻国雜記・九州下向記・九州の道の記・佐野のわたり・紹巴富士見道記・楠長詣九州下向記・東路のつと・武蔵野紀行・宗長日記』（勉誠出版、二〇〇四年）二二三頁。
- (六) 川崎佐知子「連歌師紹巴と『源氏物語』」（『中古文学』第九七号、二〇一六年六月）
- (七) 両角倉一『連歌師紹巴——伝記と発句帳——』（新典社、二〇〇二年）四四—四六頁。
- (八) 山澤学「北野社祠官筆頭松梅院の定着と豊臣政権——『北野社家日記』禪昌記の考察——」（『歴史人類』四五卷、二〇一七年三月） 禪昭は禪昌の伯父（禪祐の兄）であるとする説もある（禪祐）市古貞次他編『国書人名辞典 第三卷』「岩波書店、一九九六年、五三頁」。
- (九) 前掲（四）木田論文。
- (十) 中嶋謙昌「『石井三家系図』の成立——連歌師石井家と東九条莊下司職石井氏——」（『京都大学国文学論叢』一二二号、二〇〇四年九月）五一頁。

(十一) 前掲（七）中嶋論文、五二頁。

- (十二) 上野英子「紹巴本源氏物語の本文史——野村精一先生と潮廼舎文庫の共同研究を発端として——」（『実践国文学』九四号、二〇一八年一〇月）
 - (十三) 『大成』は「須磨」の河内本系統の諸本として七毫源氏、高松宮家本、尾州家本、平瀬本、大島河内本の校異を掲載している。
 - (十四) 片桐洋一『源氏物語以前』（笠間書院、二〇〇一年）三九九頁。
 - (十五) 岸上慎二「三条西家本 解題」（『日本大学蔵源氏物語 第一卷 三条西家証本一』八木書店、一九九四年）
 - (十六) 岡野道夫「証本源氏物語の本文について——日本大学図書館蔵本と宮内庁書陵部蔵本の性格——」（『語文』二二号、一九六五年六月）
 - (十七) 『大成』は「夢浮橋」の河内本系統の諸本として御物本、七毫源氏、尾州家本、伝津守国冬・伝慈寛筆本、大島河内本、鳳来寺本の校異を掲載している。
- [付記]
- 近衛植家証本の本文は、京都大学文学部国語学国文学研究室所蔵の写真（二〇一四年五月撮影）、『源氏物語大成』は池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇（巻一—三）』（中央公論社、一九五三年）、日本は、岸上慎二他編『日本大学蔵源氏物語第一卷—第十一卷（三条西家証本一—十一）』（八木書店、一九九四—一九九六年）所収の影印による。

（つくだ まなえ・本学文学部卒業生）